

ちつつ沈黙している人たちは、地域の生活環境の問題について近隣の人たちと話しあう機会も少なく、住民どおしの横のつながりも少ないという傾向がある。このようにみてくると、ごく大まかな傾向としては、市役所に接触するのは比較的「ゆとりのある」人たちであり、これに対して生活の不安や悩みを多くもっている層は、市役所にあまり要求も発言もしない、いわば行政からいけばん遠い距離にいる沈黙層ということができそうだ。

この後者の人たちの生活をつつんでいる気持ちは、いくら働いても生活がよくなるらない、環境の悪い二間のアパートからぬけだす目処がたたないといった諦めやいらだちである。表12で「不満はあるがどれも利用したことがない」という人に、なぜ要求をださないのかときいてみると、「どうせすぐには解決しないとと思うから」と答える人がもつとも多かつた。

こうした生活の上の問題とこのような気持ちをもつた人たちが、行政側の用意した現在の広聴制度に簡単

にのることができないのは、十分に理由のあることだとも思われる。

2 市役所との話しあい

六割は話し
あう気持ち
生活環境や公共施設の問題で、実際に市民と市役所が話しあう機会があったら、

参加する気持ちがあるかどうか(表14)。
「進んで参加する」という人と「参加しない」という人はそれぞれ約二割程度で、ほぼ同率とみられる。しかし「都合がつけば参加する」をふくめれば、参加してもよいという人は六割をこしている。

「参加する」という人は、三〇〜五〇代の人で、持家や公営団地に住む人が多い。また、「参加しない」という人は二〇代の若者および六〇歳以上の高齢者と民間アパートや一戸建借家などの民営借家層に多かつた。





横浜の私たち

毎日の生活に「満足」「不満」とはつきりした気持ちをもって居る人が、話しあいに對して参加の意欲を強く示している。また、これまでの行政との接触の点で見ると、「進んで参加する」という人の半数以上が、すでに市役所に要求をだしたことがある人で、「参加しない」という人は、広聴手段の利用率も低く、「不満はあるが利用したことはない」という沈黙層が半数以上を占めている。

話しあいに「参加しない」という人の理由をみると(表15)、仕事や家事・育児など自分の生活に精いっぱい、「少しでも時間があればもっとしたいことがある」といった気持ちがいちばん強く、なかには「関心はあるが行動する余裕がない」という人もいる。

役所との集會
に不信感も

また他方では「参加しても意見がくみ入れられない」「役所の集會に希望がもてない」「信用できない」「参加しなくても役所はわかっているはず……」など、役所との

表-14

ところで道路や下水道などの生活環境や、保育所や公園などの公共施設の問題で、市民と役所が話しあう会合があったら、あなたは参加しますか。

1. 進んで参加する 21.5%(21.5)
2. 都合がつけば参加する 39.2%(46.9)
3. 参加しない→SQへ 16.6%(22.9)
4. 場合による 20.2%(—)
5. わからない・答えない 2.4%(8.7)

SQ〔3の人に〕参加しないのはどんな理由からですか、あなたのお考えをおきかせください。〔自由回答〕

注：カッコ内の数字は、48年調査の結果である。

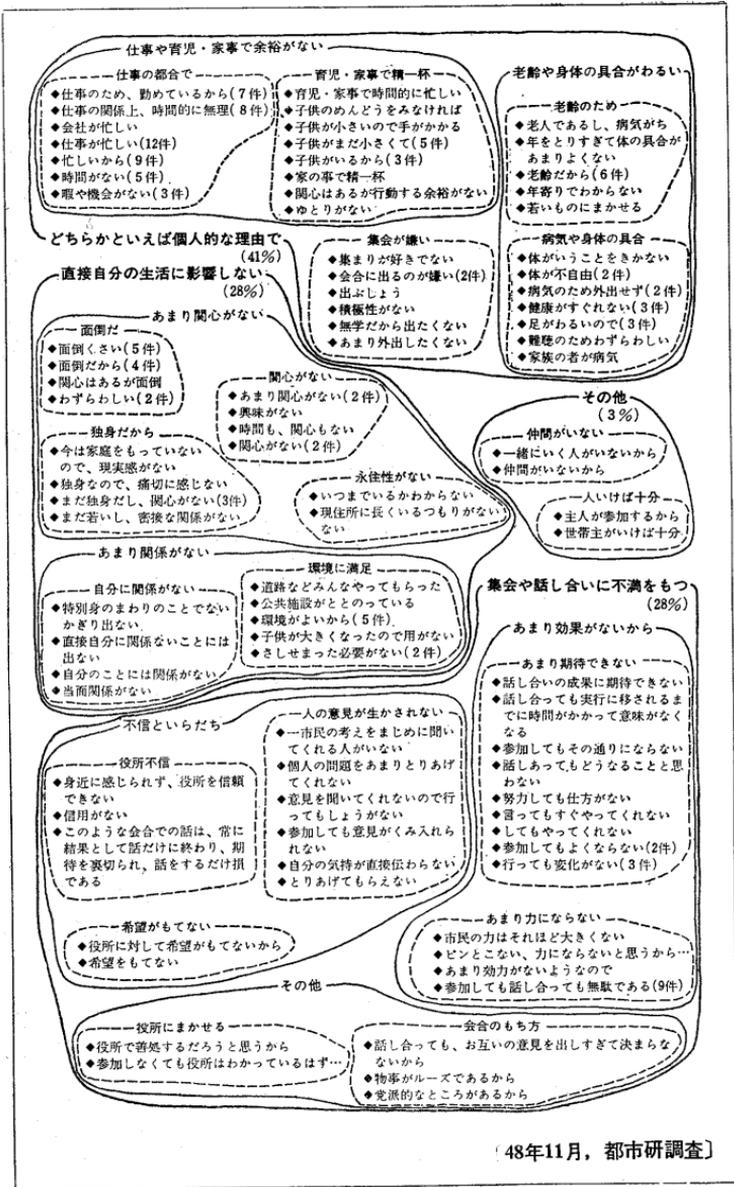
なお、48年調査では、49年調査の回答肢にある「場合による」を設けなかったため、その分だけ、回答は2・3・5の回答肢に分散している。

〔48年11月・49年4月、都市研調査〕

表-15 集會に参加しない理由



市民の行政への距離





横浜の私たち

集會に疑問をもつ人も三割近くある。そのほか、「まだ独身だし、関心がない」という若い人や、「仮り住まいだから」「興味がない」という民営借家層、逆に「環境に満足している」「関心はあるが面倒」「町の有力者や年配者にまかせる」といった理由なども多かった。

横浜市昭和六十年を目指した総合計画をつくるために、四十八年八月から十月にかけて、全市で延べ四二回、この計画案と自分たちをとりまく生活環境の問題について、市民どおしで話しあうという趣旨の集會が開かれた（正式には「あすの横浜を話しあう区民の集會」という名称だが、以下、「市民討議」と略称）。これは、役所側が準備した住民参加の制度化への一つの試みであるが、実際におこなわれたこの集會對する一般市民の受けとめ方はどうであったか（表16）。

広報その他を通じての行政側の働きかけに対して、「市民討議」集會がひらかれたことを「知っている」市民は有権者の約二割という結果であった。しかも、

表-16

横浜市では新しい総合計画をつくるために、市民同志が話し合う集會を区毎にひらきました。あなたはこの集會が、ひらかれたことを知っていますか。

1. 知っている 20.8% 2. 知らない 79.2%

→ S Q. あなたは、そのとき出席されましたか。

1. 出席した 3.5% 2. 出席しなかった 17.3%

[48年11月, 都市研調査]

「市民討議」集会を「知らない」という人は、「知っている」人にくらべて、生活へのより多くの不満をもちつつも、行政側の設けるどのような広聴手段にもあまり関心をもてないことがわかれる。また、日ごろの生活の悩みでは「出席した」人が「車や工場による騒音や空気の汚れ」「自分の病氣や老後の不安」などであるのに対して、「知らない」と答えた人では「住宅のこと」「子どもの成長や教育のこと」「家計のこと」など、直接的な生活上の問題が優先されている。

このように、横浜では現在、市民意識の底流には、役所に対して、地域の生活環境の問題でなんらかの話しあい場を望む気持ちがかかり強く動いている半面、一方では生活環境の問題など他人とあまり話したこともないという市民が有権者の三分の一強（一四〇ページ、表13参照）もあるということ、また役所との集会や話しあいに対しても、自分の生活に精いっぱいに関心をもてないという人や、役所への不信感から参加する気持ちになれない人たちが、少なくとも有権者

の二割前後はいるということがいえる。

3 政党支持と脱政党化

投票する人、
市民の政治への関心のひとつの目安として、これまでの各種選挙に対する有権者の投票傾向をみてみよう。もっとも、調査で「必ず投票する方か、それとも棄権する方か」といった質問に対しては、実際に投票しない人でも、「投票する」と答える人もあると思われる。その点、多少の誤差はあるが、表17によると、横浜でおこなわれる各種選挙の投票率は五八%前後で、実際の選挙では、その選挙への関心次第でこれに約一〇%の有権者が「投票したり、しなかったり」してプラス・マイナスする、ということになりそうだ。これに対して、「あまり投票しない」「ほとんど投票しない」「それに「当日不在」の三者をあわせた「棄権グループ」

